
愛のシルシ

春蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛のシルシ

【Nコード】

N2627B

【作者名】

春蘭

【あらすじ】

恋人らしい台詞を言ってくれない彼。私ばかり好きみたい。ねえお願い。クリスマス当日、甘い台詞を囁いて…

(前書き)

ひとあし早く、クリスマスの話を書きました（でも、そこまで関係してないかも）。愛が欲しい彼女と、不器用な彼の話です。

私の彼は、イジワルで冷たくて優しくなくて、甘い台詞をひとつもくれないような人です。

だから、私は決めたの。クリスマスまでに、なんとか愛の言葉を言わせるって！！

＊愛のシルシ＊

12月の気温とは程遠い私の暖かい部屋で、彼と一緒に過ごしていた。窓ガラスが曇っていて、外の寒さがよく分かる。屋内デートにして正解。

私は彼の肩に、コツンと頭を乗せた。彼は横目で見たけれど、それ以上なにも言わない。拒絶はしないから、嫌じゃないみたい。

（でも、彼女がこういう仕草したら普通肩抱くとかしない？
…別に期待はしてなかったけど。）

彼の表情を上目でうかがうと、彼も私を見てきた。少しドキッ、としたのは秘密。

「…なんだ？」

仏頂面で問われた。そんな怖い顔してるから、皆寄りつかないんじゃない。彼曰く、普通の顔らしいけど。

「冬は人肌恋しくなる季節なの。って事であつたため♪」

「なんだそれ…、くだらない。」

呆れた様にため息をつく彼。いつもなら気にしないのに、なぜか心に刺さった。きつと、こんなに寂しいのはこの季節のせいだ。どんなに暖かくしたって、どこか空気が冷めざめしていて、身体だけじゃなく、心まで凍える。

「…そろそろ帰るか。」

彼の声にハツとする。時計を見ると、短針が8時をさしていた。外は暗く、風でカタカタと窓が揺れてる。

「え、今日は泊まっていいよ？お母さん達いないし…。」

離れたくない、そう言いかけたところで、口を閉じた。そんな事言つたって、無駄な感じがして――。

「お前は良くても、俺はよくないんだよ。」

彼は淡々と言い放ち、立ち上がってコートを着る。

帰っちゃう

帰っちゃう

帰っちゃう

同じ言葉が頭の中を繰り返して巡った。でも、そんなワガママ言えない。

（らしくないや…。今の私、かなり女々しいかも。）

「冬なんか大嫌い。」

小さな声で呟く。

「ん？なんか言ったか？」

「べっつにー。」

わざとそんな言い方して頬をふくらませてみると、彼はフツ、と柔らかな笑みをこぼした。

「なんだよ、変な奴だな。」

そう言って、私の頭を撫でる。

（この表情、好き…。）

ポーカークフェイスの彼が時々見せる、優しい笑顔。胸の高鳴りが止まらない。安心と、幸せ。この度に私は、彼を好きだと再認識する。

「寒そうだね。マフラー貸そうか？」

玄関までの短い見送り、途中まで送ると言っただけで、断られてしまったから。外は雨が降ったら雪になりそうな程、冷えてる。

「いや、いらない。それじゃまたな。」

「うん、バイバイ。」

彼が背を向ける。私は笑顔で手を振った。取り繕いの、笑顔で。

（もうすぐクリスマスなのに、何も言わないんだ？）

途端に寂しさがこみあげてきた。今すぐにも、その背中に抱きつきたい。

ガチャ……

そんな私の望みも儚く、ドアを開ける音が悲しげに響く。

「あ、」

「え？」

外へ出る前に、彼が振り返った。そして――

「そうだ、クリスマスどこか一緒に行くか？」

「……いい、行く！」

彼の予想外の誘いに、私は考えるより先に即答した。

「じゃ、行く所考えておけよ。じゃあな。」

そう言って彼は、寒い闇夜へと出ていった。

「や、やったあー…。」

私は玄関に座りこみ、一人呟いた。自然と頬が緩んでしまう。はたから見たら、にやけてる変な人だ。

でも、それくらい嬉しい。クリスマスが最高の1日になるよう、私は今から予定を考えこんだ。

＋＋＋＋＋

長いマフラーをたなびかせ、ミニスカートにブーツだというのに、私は全力疾走中。せっかく長時間かけてセットした髪も、おおいに乱れてるだろう。

（なんでこういう日に遅刻するの私っ!?!）

時計の針は、約束の時間より30分も進んでる。無理矢理針を集合時間に戻したいと思ったけど、そんな無駄なことやってる暇はなかった。

（まだ彼がいますように!）

携帯はつながらず、なす術のない私は、すがるように何度も心の中で祈った。

「はあ、はあ、はあ…。」

集合場所に着いたのは更に10分後。息を整え、周りを見渡す。彼の姿は、ない。

（帰っ、ちゃった？）

真冬の中走ったせい、肌は冷えてるのに体の中が熱い。私は近くのベンチに座り、深呼吸をひとつ。冷えた指先を擦り合わせ、息を吹きかけた。

40分の遅刻。当然といえば当然かもしれない。だけど……

「——ッ、」

鼻がツンとして、目頭が熱くなる。今にも雫がこぼれそう。

「バカ、最低、冷酷男、女の敵、スケコマシ。」

思い付く限りの彼の悪口を、並べてみる。だけど空しさは一層積もるばかりで、瞳は更に潤う。

「結局私のこと愛してないんだ。」

「なんでそう思う？」

独り言なのに返された問い。

「だって、肩抱いてくれないし。」

「それは、嫌がられたくなかったから。」

「送らせてくれないし。」

「風邪ひいたらどうするんだよ。」

「私しか、好きって言ってないし。」

「……………」

黙りこむ彼。ほら、やっぱ言えな——アレ？なんかおかしいよね？

『独り言なのに返された問い』？『黙りこむ彼』？

（えーと……。）

「えっ!？」

「遅えよバカ。」

驚いて振り返るとそこには、愛しい人が息を白くさせ立っていた。

「帰ったんじゃ…」

「なんでお前置いて帰れるんだよ。なかなか来ないから、近く少し探してた。」

「そっか…ごめん。」

彼は鼻を赤くさせ、額には汗がにじんでいた。心配して探し回ったのかもしれない。

（愛…感じるかも。）

遅刻した身だというのに、不謹慎な事を思ってしまう。

彼は照れ屋なのか、不器用なのかわからないけど、愛の言葉がないとやっぱり不安。

私は彼の瞳をじつ、と見つめた。彼の頬がほんのり染まる。

「…俺は、冬は嫌いじゃない。」

「はっ？」

検討違いの言葉。誰が季節の話などしただろう。

「お前が寒いって言って、俺に触れてくるから…。」

「……！」

彼の台詞を理解した途端、顔に熱が集まるのが分かった。だってそれは、『好き』の一言よりずっと愛を感じた。

「…私も、嫌いじゃないかも。触れる理由が、できたから。」

私はそう言って、彼に抱きついた。寒いと泣いていた体はいつのまにか火照り、じんわりとした熱を彼とわけあう。彼も私を抱きしめて、私の耳元で小さく囁いた。

『メリークリスマス』

— H A P P Y E N D —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2627b/>

愛のシルシ

2010年10月28日08時04分発行